



Title	日本の「かわいい」と比較したアメリカの「キュート」美学の発展
Author(s)	デール, ジョシュア ポール; 入戸野, 宏
Citation	心理学評論. 2025, 68(3), p. 312-325
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103659
rights	© 2025 心理学評論刊行会 the Society of Japanese Psychological Review
Note	ジョシュア ポール デール (著), 入戸野 宏 (翻訳)

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本の「かわいい」と比較した アメリカの「キュート」美学の発展*

ジョシュア ポール デール

中央大学

The Development of the American Cute Aesthetic with Reference to Japanese Kawaii

Joshua Paul DALE

Chuo University

This article explores the history and development of the American cute aesthetic with comparisons to the other main aesthetic of cuteness, Japanese kawaii. After examining historical examples of cuteness in Japan and Europe, the article focuses on American cute, which is relatively unstudied compared to Japanese kawaii. It traces the sociocultural factors that informed the rise of the modern cute aesthetic, paying particular attention to the influence of racial difference. The article analyzes stereotypical Black characters in nineteenth-century minstrel shows and stereotypes of Japan during the *Japonisme* boom to argue that the American cute aesthetic arose by occupying liminal spaces between categories such as race and gender.

Key words: kawaii, cute, history, race, gender, minstrelsy, *Japonisme*

キーワード：かわいい、キュート、歴史、人種、ジェンダー、ミンストレル、ジャポニズム

1. はじめに

心理学では、かわいさは感情を引き起こすものとされている。接近動機づけが高く、身体的・感情的な親密さを促し、関心やケアに値するとみなされる存在の範囲（moral circle）を広げるような感情である（Nittono, 2016；Sherman & Haidt, 2011）。神経画像研究では、かわいさは脳内でトロイの木馬のように働き、私たちが向社会的に行動するよう仕向けていると推測してきた（Kringelbach et al., 2016）。かわいさに関する実証的研究は、動物行動学者のコンラート・ローレンツ（Lorenz, 1943）によって示されたベビースキーマ（Kindchenschema）が、かわいさに対する生物学的な反応の引き金として働くという仮説のもとに進められてきた。しかし、この反応の正確な性質や程度についてはまだ研究中である（Kawaguchi & Waller, 2024）。

他方、人文学の研究者たちは、ベビースキーマのような歴史横断的・文化横断的な概念を重視せず、その代わりに日本の「かわいい」やアメリカの「キュート」のような独特なかわいさの美学の発展に焦点を当てている（Dale, 2016；Dale et al., 2017）。しかし、私自身の研究は両方のアプローチの統合を試みている（Dale, 2017, 2023）。

「かわいい（kawaii）」の歴史的な経緯とそれがかわいさ研究の枠組みの中でどのように発展したかについてはどちらもすでに発表しているので（Dale, 2020, 2023, in press），本稿では、アメリカの「キュート」の発展、特に人種の違いが近代美学としての「キュート」の形成にどのような影響を与えたかについての研究上で欠けている部分を埋めてみたい。最初に、幅広い美的カテゴリーのなかでかわいさがどのように位置づけられるかを簡単に考察する。

* 翻訳者（入戸野宏）。本稿の原文は Open Science Framework で公開している (<https://doi.org/10.17605/osf.io/mqg6k>)。本研究は JSPS 科研費 JP25K03662 の助成を受けたものです。

2. 日常美学としての「キュート」と「かわいい」

シアンヌ・ナイ (Ngai, 2022) は、美的カテゴリーを「ある形態が特定の感情によって言語的評価に縫い合わされるように知覚されたもの (a perception of form, sutured by a specific affect or affects to a verbal evaluation, 訳注：たとえば、美しいものを見たらある感情が生じ、その感情を通じて対象と「美しい」という語が切り離せないほど密接に結びついて認識されるという状況を指している)」と定義している。ナイの「言語的評価」という表現は、美学が判断能力と結びついているというカント派の概念に負うところが大きい。このパラダイムは西洋では美的経験を表現する慣習的な方法であり、見る者は感情的反応に基づいて対象を判断する。しかし、現代日本の「かわいい」は、評価的というよりもむしろ情緒的なものと密接に結びついている (Nittono, 2016)。人々は熟慮の末にというよりも感じたままに「かわいい」と口にする傾向がある。

英語の「cute」は、これと同じように使われるが、ナイの言うように判断の表明として働くこともある。例えば、「cuteになるな (Don't be cute)」という表現は、子どもでもおとなでも、そのふるまいが過度に利口であざといと思える人に対して使われる。このように、一般的な意味では、「キュート」は「かわいい」よりも西洋の美的伝統に忠実であるといえる。

このことは、日本語の「かわいい」や、判断を伝えるためではなく反応として「キュート」と言うような場合をどのように考えたらいいかという問題を提起する。かわいさは主に商品美学 (commodity aesthetic) として扱われることが多いが (Merish, 1996; Ngai, 2012), 「かわいい」と「キュート」の両方が属する別のカテゴリーとして、斎藤百合子 (Saito, 2024) のいう「日常美学 (everyday aesthetics)」を考えてみることは役に立つ。

日常美学は、西洋の芸術では無視されがちだったが、人間としての体験に欠かせない部分である。斎藤 (Saito, 2024) が書いているように、「これらのアイテムや性質は人々の日常生活に遍在している」という特徴がある。職業、ライフスタイル、

経済的地位、社会的階級、文化的背景、芸術への造詣とは関係がない」。かわいさを日常美学の一つとして分類すると、伝統的な西洋芸術においてかわいさが日本に比べてこれほど少ない理由を説明できる。西洋の美術は長い間、美と崇高を志向してきた。日常性や身近さとはあまり関係のない高尚な美学である。しかし、斎藤 (Saito, 2007) は、日本には日常美学を高く評価する長い歴史があると指摘する。このことは「かわいい」美学の深いルーツにつながっているのだが、すでに私や他の人々が論じているため (Dale, 2020, in press; 増淵, 1994; 櫻井, 2009; 四方田, 2006), ここではその概略を述べるにとどめる。

3. 「かわいい」の歴史的ルーツ

「かわいい」もアメリカの「キュート」も近代の美学である。どちらの言葉も、大衆文化におけるかわいさの認知度の高まりを表現するのに使われるまで、愛すべきもの、愛らしいものという現在の意味を持たなかった (Dale, 2023)。このため、かわいさの初期の例を見つけようとするときは、現代的な感覚をいったん脇に置くようにしないといけない。学者たちは、「かわいい」の初期の例を発見するために過去をさかのぼりすぎることについて、例えば文化本質主義や見せかけの普遍主義の危険性を挙げて警告してきた (Kanesaka, 2022; Miller & Stevens, 2021)。

近代の美意識のルーツを過去に見つけるのは難しい。古代や前近代の人々が自分たちの芸術をどのように感じていたかが分かるとはかぎらないからである。今日「かわいい」と考えられる日本の古代作品には、縄文時代（紀元前 10,500–300 年ごろ）の土偶、例えば「ゴーグル型」の大きな目と短く丸みを帯びた手足を持つ遮光器土偶がある (矢島, 2019)。このような土偶の特徴は、かわいさに対する生物学的反応の引き金としてローレンツ (Lorenz, 1943) によって示されたベビースキーマの特徴である。他の初期の像、古墳時代（紀元後約 300–710 年ごろ）の埴輪（葬礼人形）のようなものも、今日では「かわいい」と考えられる (柏木, 2016; 矢島, 2019)。しかし、縄文時代や古墳時代の人々がこれらの像をどのように感じていたのかは分からない。

一方、平安時代（794–1185）の傑作である清少納言の『枕草子』には、当時の人が感じたことの証拠があると主張できる（Dale, *in press*）。『枕草子』にはさまざまな事物のリストが書かれているが、中でも「うつくしきもの」という段には、子すずめやひよこなどの動物、赤ん坊や幼い子どもの外見や行動に関する項目が含まれている。小さな植物の葉や人形遊びの道具といった小さなものも挙げられている。さらに、このリストのいくつかの項目は、ベビースキーマを拡張しようとする最近の研究に合致する。傾げた頭や子どもっぽい声などである（Huron, 2005；Shiomi et al, 2025）。当時は「かわいい」という語は存在しなかったが、清少納言が使っている「うつくし」という言葉は明らかに親愛の情を表している。ベビースキーマの特徴を備えた多くの項目と合わせると、彼女の「うつくしきもの」のリストは、かわいさの美学を初めて言葉にしたものであるとそれなりの自信をもって言える。

日本の芸術におけるかわいさのもう一つの初期の例は、湛慶（1173–1256）の作とされる木製の等身大の子犬像である（木彫りの狗児）。この像は、京都の高山寺の中興の祖である僧侶、明惠（1173–1232）が大切にしていたものだ（高山寺, 2025）。座ったポーズで、首を注意深く傾け、体をわずかに曲げ、今にも飛び上がって遊びだしそうな子犬は、無邪気さと愛らしさを醸し出している。その顔と身体の比率はベビースキーマに従っており、丸顔で、体はややふくよかで、四肢は短い。古いものだが非常によい状態で、木の表面の艶は鼻と頭で擦り切れている。寺の言い伝えによると、明恵は近くを通るたびにこの子犬を撫でるのを楽しんだという。この子犬がかわいいのは幼い身体比率のためだけではない。この作品からにじみ出てくる個性は、明恵がこの像に愛情を注いだという目に見える証拠とあいまって、感情的なつながりがかわいいものに対する私たちの反応の鍵であるという考え方を支持している（Nittono, 2016）。

『枕草子』や湛慶の木彫りの狗児のおかげで、日本の芸術におけるかわいさを平安時代や鎌倉時代までさかのぼることができる。しかし、江戸時代（1603–1868）の爆発的な芸術生産の中で、かわいさは都市商人階級の文化の最前線に躍り出た（Miller & Stevens, 2021）。円山応挙（1733–1795）

の仔犬、歌川国芳（1798–1861）の猫、耳鳥斎（1751–1803）の戯画化された武士などは、この時代の絵画、木版画、挿絵に描かれたベビースキーマのかわいさのほんの一例である（Dale, 2020, *in press*；Miller & Stevens, 2021）。

私は、以前の著作で、長期にわたる6つの美的価値観が、上記の例に見られる日本の美術や文学におけるかわいさの初期の出現と発展に貢献したと論じた（Dale, *in press*）。そのうちの4つは、文学史家のドナルド・キーン（Donald Keene）によって示唆されたもので、無常（perishability）、不均整（irregularity）、暗示（suggestion）、簡素（simplicity）である（Keene, 1981, 1988, 1995）。残りの2つは、遊び心を大切にすること（valuing the playful）と、小さなものに価値を見出すこと（an appreciation of small things）である（Lee, 1984；Tsuiji, 1986）。暗示と不均整を除けば、これらの価値はすべて日常美学のカテゴリーに入る。さてここで、美と崇高を至上の美的価値としてきた西洋美術におけるかわいさに目を向けてみよう。かわいさが近代の日常美学の一つとしてアメリカ合衆国で登場したことにより影響したさまざまな社会文化的要因をたどってみたい。

4. ヨーロッパ美術史における かわいさ表現の制約

日本とは対照的に、ヨーロッパにおける初期のかわいさの例は、当時支配的だった美しきものについての美学によって裏づけられ、当時広まっていた子どもに対する態度に影響されていた。ルネサンス期には、キューピッド（プット〔訳注：翼の生えた裸の男の子の図像〕やケルビム〔智天使〕ともいう）が流行のモチーフとなり、この傾向は数世紀続いた。しかし、子どもに似ているとはいえ、キューピッドは人間ではなかった。彼らは天使であって、その顔にはしばしば神の知識と経験の重々しさが表れていた。ルネサンス後期になって、芸術家たちが人間の姿をより写実的に描くようになると、一部のキューピッドは幼い子どものような特徴を帯び、天使のようにも、（しばしばエロティシズムの色合いを帯びて）いたずらっぽくふるまうこともあった（Wallentine, 2024）。しかし、彼らを生み出した主要な美学は依然として

美しいものについての美学であり、遊んでいるように見えたとしても、キューピッドは天使たちの序列に連なる神聖な存在であった。芸術家たちは現実の子どもたちが住む俗世間をいっさい描かなかつた（図1参照）。

実際の子どもに対する態度も、かわいさを芸術のなかで十分に表現することを妨げていた。例えば、ピーテル・ブリューゲルが1560年に描いた『子どもの遊び』を考えてみよう。この絵は200人以上の子どもたちが80以上の遊びをしている様子を描いている。一見すると楽しそうだが、子どもたちの顔をよく見ると、苦痛や恐怖などさまざまな表情をしている。笑っているのは数人だけである。子どもたちの多くは丸顔だが、ローレンツのベビースキーマには従っていない。

『子どもの遊び』に関する2つの主要な説が、ブリューゲルの作品になぜかわいさがないかを説明してくれる。第1の説では、この絵を道徳的な物語として、遊びを軽薄さと愚かさ、つまり神から遠ざかる道の象徴であると見なす。この絵が描かれたのは、原罪の教理に基づき、子どもの不滅の魂を救うためには早期の道徳教育が必要だという考え方方が生まれていた時代だったのである。第2の説では、16世紀には人文主義思想（ヒューマニズム）が発展しつつあったことを指摘し、この絵は子どもの成熟にとって遊びが重要であることを描いている、つまり、子どもの教育の一環と

しておとなとの管理下で行われる遊びを紹介していると見なす。例えば、賭博や俗っぽい遊びなど、ブリューゲルの時代に子どもたちにかなり人気だった遊びはこの絵には登場しない（Orrock, 2012）。したがって、テーマが宗教的であろうと世俗的であろうと、ブリューゲルは遊びをまじめな活動として描いているのである。

子どもっぽいおどけたしぐさやいたずらは、いつの時代でも親にとって個人的な楽しみであるが、そうしたひとときは家族のなかで喜ばれたり、愛する人への手紙に書かれたり、個人の日記に打ち明けられたりした。他方、文献記録ではこのような楽しみへの不満が何世紀にもわたって綴られている。16世紀、モンテニュは、子どもっぽい戯れや遊びにおとなが喜びを覚えることを非難した。彼はそういう行為は「自分たちの喜びのために、猿のように」子供を愛するのに等しいと考えたからである（Ariès, 1962での引用）。17世紀以降、道徳主義者や教育者たちは、子どもを喜びや楽しみの源泉と見なすだけの親を、子どもが理性的な存在となり善良なキリスト教徒へと成長するのを阻らせるという理由で厳しく非難した（Ariès, 1962）。ベビースキーマはかわいさを感じることは普遍的な能力であると指摘しているが、ヨーロッパの宗教的・社会的要因はそれが芸術に現れるのを制限したようである。

5. 子ども期の無邪気さという概念

原罪の教理は、19世紀に入っても関心事ではあったが、啓蒙主義の到来とともにその支配力を弱めはじめた。ジャン＝ジャック・ルソー（1712–1778）のような著作家は、子どもは生まれながらに無邪気である（罪がない）と主張し、この見解はプロテスタントの主流派のなかで次第に広まっていった。それと同時に、子どもを中心とした家庭生活を営み、しつけや教育に多くの注意を払うようになった新しい中産階級が台頭してきた。18世紀後半、ロマン主義はこうした態度をさらに推し進め、子どもたちを自然に近く、墮落しておらず、純粹な存在として描いた。ウィリアム・ワーズワースは1804年にこう宣言した。「栄光の雲を曳きつつ、われらの故郷なる神のもとより来りぬ。我ら幼けなきとき、天国はわれらのめぐり」といふ。



図1 「システィーナの聖母」（1513–14年）に描かれたラファエロのケルビム。Charles Gottfried Schultz（1890年ごろ）「システィーナの聖母の天使たち」、銅版画。パブリックドメイン。<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?oldid=1031610388>

にありき。」(田部重吉訳『ワーズワース詩集』岩波文庫)。これは、子どものイメージを、規律と厳格な指示を必要とする小さな罪人から、おとの罪とは無縁の、純粹で無邪気な「白紙」へときれいに逆転させた。

19世紀、産業革命の進展により、生産は集中化し、消費は増大した。女性が小さな核家族家庭に追いやられると、母子関係はより親密で、より理想化されるようになった。家族の中だけでなく社会においてもそうであった。中産階級の台頭とともに、子ども期全般、とりわけ子ども期の無邪気さという概念がますます重要になった。19世紀半ばまでに、子どもは無邪気さを体現しているという考え方方が、感情に流れやすいヴィクトリア朝時代の人々の間にしっかりと定着した(Bernstein, 2011)。

しかし重要なことに、19世紀半ばの純粹で無邪気な子どもには、いたずらで楽しいことが大好きという性質が欠けていた。この性質は、1870年代以降に発展したアメリカの「キュート」美学の不可欠な要素であることが示されている(Cross, 2004)。特に、「キュート」の美学が本格化したのは、子どものわんぱくぶりが笑えるときもあるという考え方方が表に出てきてからである(Sorby, 2018)。これは急進的な概念だった。ヴィクトリア朝時代の人々にとって無邪気さとは、子どもをおとなから引き離し、子どもをやや神秘的で究極的には知り得ない存在にさせる性質だった。子どもはいつなんどき神に召されるかもしれない貴重な所有物として扱われていた(Merish, 1996)。無邪気な子どもを「キュート」と見なす前に、このような崇高な性質を取り除かなければならなかつた。この世俗化が達成されたのは、かわいしさを受け入れ、おとなが「目新しさ、感情の解放、大衆娯楽というエーツス」(Sorby, 2018)に浸ることが許されるようになったからである。私が主張したいのは、このような環境の下で、「キュート」という言葉の意味があざとい(cunning)から愛らしい(adorable)へと変化しあげたということである。以下にその変遷のあらましを述べる。

6. 「キュート」はどのように近代の意味を獲得したのか？

『オックスフォード英語辞典(OED)』は、「cute」の近代的な使い方を1834年と1857年のアメリカの口语用例にさかのぼっている。学者たちはしばしば、OEDの1857年の用例「What cute little socks!」をこの語の「愛らしい」という意味の最初の例と指摘している(Ngai, 2012; Sorby, 2018)。しかし、これは正しいとはかぎらない。当時は「cute」を「clever(利口な、巧妙な)」の同義語として使うのが一般的だったからである。重要なことだが、上の例では意味を変えずに「cute」を「clever」に置き換えることができる(訳注:「なんて巧妙に作られた靴下でしょう！」)。cuteの用例としてOEDの1834年版では新しい金融商品の比喩として使用されたカップとボールを使ったゲームを挙げており、1857年版では人形の靴下を挙げている。人形の靴下は魅力的かもしれないが、巧妙に作られたモノもある。

さらに、上に挙げたのはまれな例外である。「キュート」美学は19世紀半ばに大衆文化に登場し始めたが、「cute」という語は典型的には人間、主におとなに対して使われた。1870年以前、この語はほとんど常に「あざとい(cunning)」「利口な(clever)」という意味であり、ジョークやいたずら、学校の先生などはすべて「cute」と形容された。これが変わりはじめたのは、アメリカの子ども向け定期刊行物が、小動物や子どもの外見を表現するのにこの言葉を使い始めてからである(Cross, 2004)。

1872年、『うちの子たち(Our Young Folks)』という雑誌に、母親が5歳の男の子に初めておとの服を着せるという物語が掲載された。金色のボタンと白いフリルのついた「きれいなチェック柄のジャケット」とズボンと小さな蝶ネクタイ。「なんてキュートなんでしょう！(How cute he looks!)」と母親は声を上げるが、それは自分が巧妙に手作りした作品ではなく、その少年のことを指している(Canby, 1872)。翌年には、「奇妙な赤ちゃん(Queer Babies)」という物語で、子どもたちがヒキガエルにカラフルな服を着せ、「わあ、とてもキュートに見える！(O, they look so cute!)」と声を上げる様子が描かれている(Locke, 1873,

斜体は原文のまま）。10–20年が経つと、おとな向けの雑誌もこの新しい用法を、スラングの一種としてではあるが、採用しはじめる。『ハーパーズ・ウェイクリー（*Harper's Weekly*）』の「犬界の王たち（*Monarchs of Dogdom*）」（1890）と題された記事で描かれた流行に敏感な若い女性は、チャイニーズ・パグの平たい顔を表現するのに「ほんとキュートでしょう（*so cute, you know*）」というフレーズを使っている。

「キュート」が動物や子どもを表現するのに使われるようになったのは、子どもに対する新しい見方を反映していた。一方では贖罪を必要とする罪人として、他方では聖なる魂の器として見られるのではなく、子どもの自然な状態が、飼いならされておらず、少し野性的で、ませていて、社会化される以前のものとして見られるようになったのである。この過程は19世紀後半にはすでに進行していた。ヴィクトリア朝時代の子どもを取り巻いていた道徳的にまじめな空気が変わり、子ども期を遊び心に満ちた軽やかな時代と見なすようになった。おとなであることの重圧から逃れるための心理的な避難場所として子ども期を見るようになると、おとなは子どもっぽいいたずらを代理体験することに喜びや楽しみを見出すようになった（Cross, 2004）。モンテニュがおとなを演技で楽しませる猿のように子どもを見ることに憤慨してから丸3世紀が経ち、成熟の入り口にある子どもの位置づけがようやく娯楽の源泉として評価されるようになったのである。

より広範な社会の変化がこの変革を後押しした。乳幼児死亡率は1880年代から急速に低下した。就学率は上昇し、児童労働率は低下した（Stearns, 2010）。あらゆる階層の子どもたちが、「経済的には『価値がない（worthless）』が、感情的には『とても貴重（priceless）』」になった（Zelizer, 1994）。消費が拡大するなか、企業は親に向けて次々と製品を売り込み、たくさんの子どもたちを広告に登場させた。消費資本主義の台頭が階層化の不安を引き起こし、人種間の緊張をあおると、おとなたちは子ども期を、空想の世界、現代生活の重圧から逃れるための代理的な避難所と見なすようになった（Gubar, 2016）。本稿の残りの部分では、アメリカの「キュート」美学が、人種とジェンダーにまつわるステレオタイプをまずは取り込

み、次に抽象化することで、どのように形成されていったかについて説明する。

7. かわいさと人種

感傷的なものを遊び心のあるあざとさと結びつけたことにあらわれているように、新しいアメリカの「キュート」にはある種のアナーキー（無秩序）な性質があった。*cute* という語（acute [鋭い] の短縮形）が利口というより愛らしいものを意味するようになった後も、そこには何か鋭いトリックスター（いたずら者）の性質が残されており、それがこの語の文化的表現の鍵となった。鋭いといっても、視覚的な意味ではない。かわいいものは丸く柔らかい傾向にある。かわいさは社会的慣習にもかかわらず心を突き刺すことができるという意味である。この切り込むような性質は、19世紀から20世紀初頭にかけて、人種の違い（これは当時も今も喫緊の社会課題である）に関する社会規範（mores）をひっくり返した。ミンスト렐・ショー（minstrel show）と呼ばれる大衆娯楽の舞台で演じられた人種の違いについての歴史をたどることで、アメリカの「キュート」美学を定義づけるアナーキーな性質の重要な源泉が見つかるだろう。

ミンスト렐・ショーは、アメリカ独特の、あからさまに人種差別的なエンターテイメントの形式であり、19世紀初頭から20世紀初頭までの約100年間人気があった。ミンスト렐・ショーでは、白人の演者たちが「黒塗り」の化粧をしてアフリカ系アメリカ人のキャラクターになりきって舞台に上がり、コミカルな歌や踊りとともに、茶目っ気のある不器用さと世間知らずなあざとさの物語をくりひろげた。19世紀後半までは、ミンスト렐劇団は大西洋を渡りヨーロッパ公演を行うほどの人気を博した。顔を黒く塗ったミンスト렐を演じた白人たちは、奴隸または解放されたアフリカ系アメリカ人から話し方、身振り、踊り、歌を盗み、白人の観客に合うように改変し、奴隸制度が愉快で公正で自然なものであるかのように装って上演した（Lott, 1993）。

アフリカ系アメリカ人を幼児化し脅威を感じさせないイメージとして舞台に取り上げることで、ミンスト렐・ショーは真にアメリカ的な最初の

芸術形態として当初は理解された (Lott, 1993)。ミンストレル・ショーでは、外見とふるまいの両方で、あざとく世間知らずな様子が演じられた。顔を黒く塗ったミンストレルが示した、誇張された大きな目と口、手足を柔軟に動かすシャッフル・ダンス・スタイル、コミカルな尻もちや暴力的なアクシデント、さらにはトリックスターのようなふるまい、社会規範に従うと同時にそれを裏切るジョークなど、そのすべてが新しいアメリカの「キュート」文化に吸収された。

しかし、ミンストレル役者が本当にキュートさを擬人化するようになったのは、ステレオタイプ的な新しいキャラクター「ピッカニニー (pickaninny)」が登場してからである。ピッカニニーとは黒人の子どもの人種差別的表現である（「ピック」は綿花を摘むことからきている）。陽気で若々しいエネルギーと騒々しさにあふれたこの空想上のキャラクターは、痛みに鈍感であり、ひどく扱われてもゴムまりのように立ち直った。現実の子どもたちとは異なり、ピッカニニーは同情や共感を呼び起こさず、無邪気さの概念から外れたところに存在していた。以下で私は、ピッカニニーが子どものイメージを純粋・神聖から不敬・世俗へと作り直す原動力となり、この変容が「キュート」美学を発展させる1つの主要因であったと論じることにする。

レイチェル・バーンスタイン (Bernstein, 2013)によれば、19世紀半ばには、黒人の子どもはどんなに悪くても軽く見くびられる程度であった。皮肉なことに、ハリエット・ビーチャー・ストウの反奴隸小説『アンクル・トムの小屋』が出版されると、この状況は変わった。1852年の初版からたちまち大ヒットし、ストウの作品は19世紀で最もよく売れた小説となった。エヴァとトプシーというキャラクターにおいて、『アンクル・トムの小屋』は2つの子ども期の見方を示している。エヴァは、白人の子どもで、純粋な無邪気さの見本である。他方、トプシーは、黒人奴隸の子どもで、世間知らずだがあざといトリックスターとして描かれ、エヴァの愛情深い道徳的影響によって改心する。

『アンクル・トムの小屋』の舞台版では、黒塗りの白人の子どもがトプシーを演じ、そのキャラクターは全米でヒットした。しかし、小説とは異

なり、舞台版のトプシーはおてんぱないたずらに喜びを感じ（彼女のテーマソングは「あたしはほんとに悪い (I'se so wicked)」（訳注：I'se は I is）、奴隸として受けた痛みや苦しみには無頓着だった。小説の中でストウがトプシーを通して表現した、奴隸制度によって心がすさんでしまった子どもたちも元の無邪気な状態に戻れるという主張は、舞台では失われた。トプシーは生意気な黒人の子ども（ピッカニニー）のコミカルなカリカチュア（戯画、風刺画）へと変貌したからである (Bernstein, 2011, 2013)。

トプシーは『アンクル・トムの小屋』の舞台でスターとなり、この役を演じる子役が主役を務めることもあった。このようなショーが急増し、それぞれが他を凌駕しようとするため、時には2人のトプシーが同時に舞台に立つこともあった (Nyong'o, 2002)。トプシーは純粋な見世物となり、人間のキャラクターというよりむしろ遊び道具となって、無数の模倣を生み出した。トプシーの人気を受けて、顔を黒く塗った子どもたちがピッカニニー、つまり「ピックス (picks)」を演じるボードビルショーも登場した (Gubar, 2014)。

劇作家ジョージ・エイケンの舞台版『アンクル・トムの小屋』(1853年)には、ミンストレルから多くの要素が取り入れられており、彼自身が考案した新キャラクターも含まれている。「ガンプション・キュート (Gumption Cute)」は白人のスキヤラワグ (訳注：南北戦争後、私利のために復興政府に協力した南部白人) で、ミンストレル・ショーの伝統に沿って早口でまくしたてるコミカルなキャラクターだった (Meer, 2005)。トプシーと言葉遊びでやりあいながら、ガンプション・キュートは言う。「あなたはキュートすぎる。私よりキュートだ。私は名前もキュートだし、生まれつきキュートだ」 (Aiken, 1853)。「キュート」という言葉がまだ利口なおとなを指していた時代、この一節は、トプシー（世間知らずだがあざとい少女キャラクターで、白人の観客に向けて黒塗りで演じられた）が、アメリカの「キュート」美学の進化を表す特殊なたちで、利口さと愛らしさを融合させたことを示している。

子どもが舞台で悪さをして痛くなさそうな程度に叩かれる姿は、顔を黒く塗ったキャラクターに限ったことではなかった (Gubar, 2014)。しかし、

ピッカニニーというキャラクターは、発展しつつあったアメリカの「キュート」美学が、子どもについての2つの対照的な考え方をどのように融合させたかを示している。一つの考え方では、子どもを純粋な無邪気さを体現したものと見なし、もう一つのより古い考え方では、子どもは飽くなき欲求をもった手のかかる生き物であり、手なづけて社会に適合させる必要があると見なした(Cross, 2004)。

ゲイリー・クロス(Cross, 2004)によれば、20世紀初頭になると、子どもの欲望は自然で善良なものと見なされようになり、育児の専門家たちは子どもの好きにさせるようにと親に助言するようになった。これに伴い、子どもたちのわがままな情熱は、たとえそれがいたずらにつながったとしても、罰するのではなく愛し慈しまれるべきものとなつた。無邪気さの概念は「若い美しさが持つ世間知らずな様子」を含んでおり、それは子どもの自然なエネルギーや元気さに対する新たな評価と結びついてはじめて「キュート」と呼び替えられるようになった。この新しい概念はある特別な境界線を占めていた。「かわいさは、子どもとおとの両方を許容範囲のぎりぎりまで、さらには自制心という一線を越えさせ、遊び心にあふれた不まじめでアナーキーな瞬間へと連れて行く」(Cross, 2004)。ミンストレルの伝統は、アメリカの「キュート」美学の中核にある、この野性的でアナーキーな要素の一つの源泉となった。しかし、なぜこれほどまでに支持され、定着したのだろうか？

8. アメリカの「キュート」美学の中心にある 「融合されていない要素」

アフリカ系アメリカ人のパフォーマーとして当時最も有名だったバート・ウイリアムズ(1874–1922)は、次のように書いている。「同化していない奇妙な要素が国家にあると、ほとんどすぐにおどけ役として、たいていは戯画化されて舞台に登場する。だから、アメリカの最初のおどけ役は黒人(ジム・クロウと仲間たち)だった。その後、移民の波が押し寄せてくると、アイルランド人やイタリア人がその役になった。……しかし、黒人は、融合されていない要素としてずっと存続

し、その娯楽性を保ってきた」(Williams, 1910)。ウイリアムズの言うことが正しければ、ミンストレルの伝統であるコミカルなカリカチュアがこれほど力を持ちづけたのは、まさにアフリカ系アメリカ人が多数派の白人が構築した主流社会から切り離されたままだったからにはかならない。

ウイリアムズの言う「融合されていない要素」つまり野性や原始性と結びついて社会秩序の外にあると考えられたものは、アメリカの「キュート」を構成する基本要素となった。ニコラス・サモンド(Sammond, 2015)によれば、目と口を大きく見せる黒塗り顔メイクは、「アフリカ系アメリカ人の一般的なステレオタイプに合致していた。口が半開きで、貪欲でありながら単純で、無邪気で、すぐにおびえたり興奮したりする、つまりは幼児的で、むさぼるような目や口である」。こうした、人種差別的なステレオタイプに基づく子ども期の誇張された特徴は、アニメ映画という新しいメディアに登場すると、アメリカの「キュート」美学の素材となつた。

例えば、サモンド(Sammond, 2015)やその他の研究者は、ミッキーマウスは、バッグス・バニー、フィリックス・ザ・キャットといった他のアニメキャラクターとともに、ミンストレルの痕跡を残しており、「顔を黒く塗ったミンストレルのしるしを、すぐにそうとは分からないように身体に宿している」と論じている(Bernstein, 2011; Sammond, 2015)。黒い頭と体、白く縁取られた大きな口、大きくて丸い白目がちの目、そしてこれらのキャラクターの前足を人間の手のように見せている白い手袋は、すべてミンストレルから直接引用したものであった(Inge, 2006; Sammond, 2015)。

このことは、これらのアニメキャラクターが人種差別的だと言っているのではない。バーン斯坦(Bernstein, 2011)が書いているように、「子ども文化には、黒塗りの顔や動きのスタイルを(歪めながらも)保存し、(断片化しながらも)伝える特別な能力がある」。このようにして、アメリカの「キュート」の過激な側面は徐々に排除されていった。この変容はとりわけミッキーマウスの進化を見てとれる。初期のミッキーのずうずうしさと暴力性は、黒塗りのミンストレルのキャラクターをまねたものであったが、悪い影響を及ぼした(Sammond, 2015)。1931年まで、親たちは

ミッキーが子どもたちの悪い手本になるとディズニーに苦情を書き送っていた(Inge, 2006)。そのため、ディズニー・スタジオはミッキーの行動を変え、また少しづつ外見も変えていった。ステイブン・ジェイ・ゴールド(Gould, 1980)が指摘するように、これら初期のキャラクターはもっと動物的な外見であったが、だんだんと幼く見えるようになった。この外見の変化によって、ミッキーはローレンツのベビースキーマに徐々に近づいた(Gould, 1980)。

こうして、アメリカの「キュート」美学は、同時期に日本で発展した近代の「かわいい」美学に近づこうとしていた(Dale, 2023)。しかしながら、ミンストレルから取り込んだアーネークーな要素、つまり、社会的慣習から外れているからこそ魅力的で、キュートな対象へと人を引きつける何かは、たちまち新しいアメリカの「キュート」美学の特徴となった。さらに、それは今日まで続いている。『グレムリン』(1984年)のような映画から、『グランピー・キャット』(訳注: 不機嫌そうな顔で有名になった実在のネコ)のようなインターネット・ミームに至るまでのすべてに含まれている。

アフリカ系アメリカ人は、多数派の白人によって構築されたアメリカ社会への参入を拒否された唯一の「融合されない要素」ではなかった。見た目が異なる他のマイノリティ、アジア系アメリカ人などもまた、こうした差別に直面していた。以下では、日本文化や日本人に対する西洋のステレオタイプがアメリカの「キュート」美学に与えた影響を概説し、「かわいい」がアメリカの「キュート」に与えたかもしれない影響について推測を述べる。

9. 日本に対するジャポニスムステレオタイプがアメリカの「キュート」に与えた影響

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アジア系アメリカ人に対する偏見はますます強まり、世紀の変わり目には「黄禍(yellow peril)」と呼ばれた。だが、このような理不尽な怖れと憎悪が拡大したのは、日本文化の人気がかつてないほど高まった時期でもあった。「ジャポニスム(Japonisme)」や日本ブームとして知られているように、日本の

美術品や装飾品への熱狂は1860年代に始まった。ゴッホやモネ、ドガといった西洋の芸術家たちが、絵画や彫刻、木版画に見られる日本の美意識に魅了されたのだ。彼らは、着物や根付といった日常生活で使われる品々にも魅せられた。これらの品々にも遊び心や想像力が表現されている(Napier, 2007)。

ラフカディオ・ハーンは、日本について的一般向けの本を10冊以上出しているが、「日本には珍品や精巧な工芸品がたくさんあるので、あなたは戸惑うだろう」と書いている(Napier, 2007より引用)。日本ブームが続き、芸術家にとどまらず、拡大する中産階級へと波及すると、扇子や磁器、人形といった手ごろな価格の品々が人々を魅了するようになった。このような製品は成長しつつある消費文化にぴったりであった。この時代には、家をどのように装飾するかについて女性が決定することが増えたのである(Napier, 2007)。

1895年、松木文恭^{ぶんきょう}という日本人商人がボストンに「ホワイト・ラビット(the White Rabbit)」という店を開いた。松木は、美術品、日用品、画材など、計20,000点以上をすべて日本から輸入し、在庫として持っていた(Rodman, 2013; Yoshihara, 2003)。松木は1899年に、笑ったウサギのロゴを作り、彼の店に関連するすべての印刷物に載せた(Rodman, 2013)。彼の1904年の画材カタログには、筆やインクだけでなく、デザイン本や型紙も含まれており、中流階級の女性が多かった彼の顧客が、自分なりの日本風デザインを作れるようになっていた(Yoshihara, 2003)。

松木の1904年版カタログの表紙には、日本人画家がウサギを生き生きと描いているイラストが載っており、ウサギは文字どおりページから飛び出している(図2参照)。笑ったウサギのロゴを含むこれらのデザインは、アメリカの家庭を飾る無数の磁器、扇子、人形、その他の小物に加わった。こうして、日本の「かわいい」は、アメリカの「キュート」美学が成熟し爆発的な人気を博したのと時を同じくして、デザインの世界での共通語彙となった。しかし、その人気は物品にとどまるではなく、当時流布していたステレオタイプから逃れることもできなかった。

エリカ・カネサカ・カルネイ(Kalnay, 2020)は書いている。「『キュート』美学と日本や日本製品



図2 松木文恭『日本美術・画材目録』(1904年)の表紙。パブリックドメイン。<https://archive.org/details/catalogueofjapan00mats>

との関係は、少なくとも20世紀初頭にさかのぼり、商品オリエンタリズム（訳注：「東洋らしい」ものの商品化）と子ども文化のグローバル化とともに生じた。かわいさが、子ども文化とそれに対するおとなのノスタルジーと結びついていることは、アメリカの「キュート」と日本との関係を理解する鍵である。実際、1880年から1920年まで、ヨーロッパとアメリカの大衆文化は子どもという存在を中心にしており、同時代の作家は「子ども崇拜（cult of the child）」と呼び、20世紀はその幕開けとともに「子どもの世紀」と宣言された（Gubar, 2016；Merish, 1996）。このような子どもらしさを称賛する風潮のなかで、特に日本は「子どもたちの天国（a paradise for children）」と呼ばれた（Salomon, 2018、訳注：幕末から明治にかけて日本を訪れた多くの外国人〔エドワード・モースやイザベラ・バードなど〕が述べている）。その後広く知られる表現となったが、このような言葉で一般化することは、日本の親が子どもに示す愛情や、子どもが幸せそうに見える様子、玩具や菓子などの子ども向け商品が豊富にあることなど、いくつかの要素に基づいていた。それは欧米にとって日本文化が魅力的だったことを示すとともに、西洋文化で高まる子どもへの関心の野心的

な目標ともなった（Salomon, 2018）。

さらに、日本人、特に日本女性は、小さく、無邪気で、子どもらしいとする西洋のステレオタイプによって幼児のように扱われた。ピエール・ロティの1887年の自伝的小説『お菊さん（Madame Chrysanthème）』は、プッチーニの1904年の歌劇『蝶々夫人（Madama Butterfly）』の着想源となつたが、日本人女性を「小さなニッポン人形」と表現しており、この短い作品にはpetit（小さい）という単語が350回以上も登場する。『蝶々夫人』の人気は、1885年のギルバート・アンド・サリヴァンの喜歌劇『ミカド（The Mikado）』とともに、20世紀初頭のアメリカで日本をテーマにした演劇作品の熱狂に火をつけた。これらの劇に登場する日本人は、ほとんどの場合、白人俳優が「アジア人」メイクで演じた。ミンストレル役者が着用する黒塗りメイクと同類であり、「イエローフェイス」と呼ばれることがあった（Yoshihara, 2003）。アメリカの女優プランチ・ペイツは、日本人のキャラクターを演じることでよく知られていたが、彼女はこれらの役を「未熟で子どものような女性の小さな人形」として演じたと語っている（Yoshihara, 2003）。

ミンストレルのように、これらの舞台作品は通俗的なカリカチュアに基づいていた。日本女性は感情を表に出さず従順であると同時に、甘美で無邪気なものとして描かれた（Napier, 2007）。白人の観客は、女性も含めて、この資質の組み合わせに魅了された。アメリカ人女性は自分たちをまったく違ったふうに、自己主張が強く才能があると見なしていた。しばらくすると、このような自分たちとは異なる女性像を、地域のコミュニティや大学で上演される日本をテーマにしたアマチュア演劇で追求することが流行した（Yoshihara, 2003）。白人女性はまた、仮装パーティーや写真撮影のために着物を着て「イエローフェイス」の化粧をすることでステレオタイプ的な空想上の日本女性を体現した（Yoshihara, 2003）。

10. 「東洋のエデン（楽園）」

このように、日本製品や日本人が小ささや子どもらしさと結びつけられたことが、アメリカの「キュート」美学の発展に影響を与えた。だが、

その影響は顔を黒く塗ったミンストレルとは異なっていた。日本のステレオタイプはアナーキーなエネルギーではなく、むしろ（訳注：アダムとイブの）堕落以前の楽園だったからだ。日本が「東洋のエデン（楽園）」と呼ばれたのは、西洋諸国が工業化の弊害に直面し、もっと無邪気な時代に戻りたいと願っていたときだった（Salomon, 2018）。

スザン・ネイピア（Napier, 2007）は『ミカド』についてこう書いている。「最も魅惑的な登場人物は『学校を出たばかりの3人の小さなメイド（Three Little Maids from School）』である。彼女たちは本質的に『かわいさ』を演じている。それは、ヴィクトリア朝時代における少女期を風刺とともに、現代日本の女子学生を中心に展開するかわいさの文化をまるで予見するようである」。史上最も成功したアニメシリーズである武内直子の1990年代のマンガ『美少女戦士セーラームーン』の世界的人気とともに、女子学生は現代の「かわいさ」の担い手となった。アクションとかわいさを兼ね備えたそのセーラー服のキャラクターたちは「女性らしい戦い方」を披露し、女性のエンパワーメントの一つのイメージを提供し、それが西洋の視聴者にとって非常に魅力的であった（Hemmann, 2014）。

マンガやアニメのような現代の文化的輸出品には上記のようなエンパワーメントの要素もあるが、日本の少女や女性は受動的で無邪氣で我慢強いという100年続くステレオタイプは、ミンストレル・ショーの根底にあったアフリカ系アメリカ人のステレオタイプと同様、根強く残っている。米国において「かわいさ」が人種的な美学としてどのように機能しているかを分析したレスリー・ボウはこう書いている。「人種的欲望（訳注：特定の人種に対する嗜好や関心）を表出することは21世紀では禁じられているが、『かわいさ』スタイルはポジティブな感情を通してその禁止を回避するのに役立っている」（Bow, 2019）。このように、アメリカの「キュート」美学が、人種差別的なカリカチュアを和らげ抽象化することで、かわいさのキャラクターやモノの魅力を高めてきたという過程はいまだに続いている。

11. 日本の「かわいさ」における人種的イメージ

1854年、マシュー・ペリー提督の船の乗組員は、日本側の交渉官を楽しませるためにアマチュアのミンストレル・ショーを上演した。顔を黒く塗った姿の水兵が舞台で戯れる姿は観客を喜ばせ、多くの笑いを誘ったと報じられた。このショーは後に木版画として記念に残されている（Russell, 1991）。このように最初に紹介されてから黒塗り顔のイメージが続いていることについて、ジョン・ラッセル（Russell, 2012）は「さまざま形をとりながら、日本はそれ以来ずっとその魅力にとらわれてきた」と述べている。この議論を踏まえ、カネサカ（Kanesaka, 2022）は、黒塗りメイクのデザインで1960年代に大流行した空気ビニール人形「ダッコちゃん」を分析して、「『かわいさ』は長い間ずっと人種的なトラウマと欲望に貫かれた美学である」と論証している。

人種差別的な思考パターンに対抗する「かわいさ」の傾向を指摘する学者もいる。トーマス・ラマール（Lamarre, 2008）は、漫画家が擬人化された動物キャラクターを創造することを通じて、人種間の問題を種の関係へといかにして置き換えたかを示している。彼は、手塚治虫の戦後マンガが、戦時中の人種差別を「世界市民主義の時代において、人間ではない存在を育む倫理」へと変容させたことを見出した。その後、「かわいさ」動物キャラクターについて分析するなかで、ラマール（Lamarre, 2011）は、かわいさの美学をネオテニー（訳注：おとなになんでも幼いときの形状や性質が残されること）という生物学的概念として捉えなおす「知覚的転換」を提案している。ミッキーマウスが長い年月をかけて若返って描かれるようになったことを表現するグールドの「逆向きの成長（growth in reverse）」という言葉を引用しながら、ラマールは、ネオテニー的なかわいさが、社会的ダーウィニズムに由来する人種差別的な階層構造（訳注：成熟した強いものが優位になる）を批判する手段になりうると提案している。というのは、未熟さや幼さは、肯定的で進歩的ともいえる特性であり、コミュニケーションを取ったり縛を築いたりするための「種を超えた可能性」を有すると考えるからである（Gould, 1980；Lamarre,

2011)。かわいさをネオテニー的現象と見なすことで、友好的であること、好奇心、適応性といった、社会化の時期にある幼い人間や動物に共通する幼い特徴が強調される。したがって、かわいい対象の元になったステレオタイプが抽象化によって覆い隠されてしまったときでも、ネオテニーの観点からは分析できるかもしれない。

12. 結論

本稿では、ベビースキーマが生物学的反応に基づくものであるにもかかわらず、歴史的・文化的要因の制限を受けて働いていることを概説してきた。ヨーロッパでは、芸術的・宗教的・社会的な価値観によって、美術史におけるかわいさの出現が日本に比べて制限された。さらに、近代アメリカの「キュート」美学は、心理学的にはかわいさと拮抗するように見える反社会的な要素を取り入れて発展した。つまり、人種についてのカリカチュアやステレオタイプを徐々に軟化させることで形成されたのである。この過程で、白人の子どもの動物的でアナーキーとみなされた性質が、黒人の子どものカリカチュアへと転嫁されることを通じて、受け入れられるようになった。日本女性の従順で柔軟であるというステレオタイプは、自立していく主張が強いと自負するアメリカ白人女性によって熱狂的に演じられた。やがて、こうしたあからさまに人種差別的なカリカチュアの属性は抽象化されることによって薄らいでいった。

これに対して、ネオテニーという生物学的概念は、「キュート」と「かわいい」の美学が境界を越えてつながる可能性を強調する別の観点を提供する。今後の研究では、かわいさを心理学的反応として、また特定の時代や場所と結びついていくつかの独自の美学として考察してみるのが有益であろう。かわいさの美学に関する研究に心理学的な視点を取り入れることで、またその逆を行うことで、今後、あらゆる学問分野におけるかわいさの研究に向けた生産的な道を切り開くことができるだろう。

訳者ノート

この論文は本特集号のために書き下ろされたものである。原著者と緊密に連絡をとり、加筆や修

正も依頼しながら翻訳を行った。原文の *kawaii* はカギカッコつきの「かわいい」、アメリカに特化した *cute* はカギカッコつきの「キュート」とした。一般的用法での *cute / cuteness* は、カギカッコをつけずに、かわいい／かわいさとした。*innocent* は「罪のない」「悪気のない」という意味であり、「無邪気」と訳した。*cunning* は「誰かをだまして抜け目なく目的を達する」という意味であり、「あざとい」と訳した。*clever* は否定的なニュアンスを残して「利口な」と訳した。*neoteny* は「幼形成熟」と訳すこともあるが、本稿では、おとなになっても幼少期の特徴が保たれることを意味しているので、「ネオテニー」と片仮名で表記した。訳文の草稿にご助言いただいた井原なみはさん、中村野々香さん、八木（大橋）紅音さんに感謝します。翻訳にあたり、JSPS 科研費 JP21H04897 の助成を受けた。

文献

- Aiken, G. (1853). *Uncle Tom's cabin*. Samuel French.
- Ariès, P. (1962). *Centuries of childhood: A social history of family life*. Baldick, R. (Trans.). Alfred A. Knopf. Originally published: Ariès, P. (1960). *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*. Plon. 杉山光信・杉山恵美子（訳）(1980)「子供」の誕生：アンサン・レジーム期の子供と家族生活 みすず書房
- Bernstein, R. (2011). *Racial innocence: Performing American childhood from slavery to civil rights*. New York University Press.
- Bernstein, R. (2013). Signposts on the road less taken: John Newton Hyde's anti-racist illustrations of African American children. *J19: The Journal of Nineteenth-Century Americanists*, 1, 97–119.
- Bow, L. (2019). Racist cute: Caricature, kawaii-style, and the Asian thing. *American Quarterly*, 71, 29–58.
- Canby, M. T. (1872). Birdie's birthday party. *Our young folks: An illustrated magazine for boys and girls*, 8, 685–690.
- Cross, G. (2004). *The cute and the cool: Wondrous innocence and modern American children's culture*. Oxford University Press.
- Dale, J. P. (2016). Cute studies: An emerging field. *East Asian Journal of Popular Culture*, 2, 5–13.
- Dale, J. P. (2017). The appeal of the cute object: Desire, domestication, and agency. In J. P. Dale, J. Gogglin, J. Leyda, A. P. McIntyre, & D. Negra (Eds.). *The aesthetics and affects of cuteness* (pp. 35–55). Routledge.

- Dale, J. P. (2020). Cuteness studies and Japan. In J. Coates, L. Fraser, & M. Pendleton (Eds.). *The Routledge companion to gender and Japanese culture* (pp. 320–330). Routledge.
- Dale, J. P. (2023). *Irresistible: How cuteness wired our brains and conquered the world*. Profile Books.
- Dale, J. P. (in press). Kawaii: The deep roots of a modern aesthetic. In M. Landeck (Ed.). *The handbook of Japanese aesthetics*. Routledge.
- Dale, J. P., Goggin, J., Leyda, J., McIntyre, A. P., Negra, D. (Eds.). (2017). *The aesthetics and affects of cuteness*. Routledge.
- Gould, S. J. (1980). A biological homage to Mickey Mouse. In S. J. Gould. *The panda's thumb: More reflections in natural history* (pp. 95–107). Norton Press.
- Gubar, M. (2014). Entertaining children of all ages: Nineteenth-century popular theater as children's theater. *American Quarterly*, 66, 1–34.
- Gubar, M. (2016). The cult of the child revisited: Making fun of fauntleroy. In L. Marcus, M. Mendelssohn, & K. E. Shepherd-barr (Eds.), *Oxford twenty-first century approaches to literature: Late Victorian into modern* (pp. 398–413). Oxford University Press.
- Hemmann, K. (2014). Short skirts and superpowers: The evolution of the beautiful fighting girl. *U.S.–Japan Women's Journal*, 47, 53–54.
- Huron, D. (2005). The plural pleasures of music. In J. Sundberg & W. Brunson (Eds.), *Proceedings of the 2004 Music and Music Science Conference*. Kungliga Musikhögskolan & KTH. pp. 1–13.
- Inge, T. M. (2006). Mickey Mouse. In D. R. Hall and S. G. Hall (Eds.), *American icons: An encyclopedia of the people, places, and things that have shaped our culture* (pp. 473–480). Greenwood.
- Kalnay, E. K. (2020). Yellow peril, oriental plaything: Asian exclusion and the 1927 U.S.-Japan doll exchange. *Journal of Asian American Studies*, 23, 93–124.
- Kanasesaka, E. (2022). Racist attachments: Dakko-chan, black kitsch, and kawaii culture. *positions*, 30, 159–187.
- 柏木麻里 (2016) かわいいやきもの 東京美術.
- Kawaguchi, Y., & Waller, B. M. (2024). Lorenz's classic 'baby schema': A useful biological concept? *Proceedings of the Royal Society B*, 291, 20240570. <http://doi.org/10.1098/rspb.2024.0570>.
- Keene, D. (1981). *Appreciations of Japanese culture*. Kodansha International.
- Keene, D. (1988). *The pleasures of Japanese literature*. Columbia University Press.
- Keene, D. (1995). Japanese aesthetics. In G. H. Nancy (Ed.), *Japanese aesthetics and culture: A reader* (pp. 27–42). State University of New York Press.
- 高山寺 (2025) 木彫りの狗兒. Retrieved January 16, 2025, from <https://kyoto-kosanji.jp/en/treasure/08/>
- Kringelbach, M. L., Stark, E. A., Alexander, C., Bornstein, M. H., & Stein, A. (2016). On cuteness: Unlocking the parental brain and beyond. *Trends in Cognitive Sciences*, 20, 545–558.
- Lamarre, T. (2008). Speciesism, part I: Translating races into animals in wartime animation. *Mechademia*, 3, 75–95.
- Lamarre, T. (2011). Speciesism, part III: Neoteny and the politics of life. *Mechademia*, 6, 110–136.
- Lee, O-Y. (1984). *Smaller is better: Japan's mastery of the miniature*. Huey, R. N. (Trans.). Kodansha International. 李 御寧 (1984) 「縮み」志向の日本人 講談社.
- Locke, E. (1873). Queer Babies. *Our young folks: An illustrated magazine for boys and girls*, 9, 563–564.
- Lorenz, K. (1943). Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung (The innate forms of possible experience). *Zeitschrift für Tierpsychologie*, 5, 235–409.
- Lott, E. (1993). *Love & theft: Blackface minstrelsy and the American working class*. Oxford University Press.
- 増淵宗一 (1994) かわいい症候群 日本放送出版協会.
- Meer, S. (2005). *Uncle Tom mania: Slavery, minstrelsy, and transatlantic culture in the 1850s*. University of Georgia Press.
- Merish, L. (1996). Cuteness and commodity aesthetics: Tom Thumb and Shirley Temple. In R. G. Thomson (Ed.), *Freakery: Cultural spectacles of the extraordinary body* (pp. 185–203). New York University Press.
- Miller, L., & Stevens, C. (2021). From beautiful to cute: Shifting meanings in Japanese language and culture. *International Journal of Language and Culture*, 8, 62–83.
- Monarchs of Dogdom. (1890). *Harper's Weekly*, 34, 122–123.
- Napier, S. J. (2007). *From impressionism to anime: Japan as fantasy and fan cult in the mind of the West*. Palgrave MacMillan.
- Ngai, S. (2012). *Our aesthetic categories: Zany, cute, interesting*. Harvard University Press.
- Ngai, S. (Ed.) (2022). *The cute*. Whitechapel Gallery.
- Nittuno, H. (2016). The two-layer model of 'kawaii': A behavioural science framework for understanding kawaii and cuteness. *East Asian Journal of Popular Culture*, 2, 79–95.
- Nyong'o, T. (2002). Racial kitsch and black performance. *The Yale Journal of Criticism*, 15, 371–391.
- Orrock, A. (2012). Homo Ludens: Pieter Bruegel's children's games and the humanist educators. *Journal of Historians of Netherlandish Art*, 4, 1–42.
- Rodman, T. (2013). A modernist audience: The Kawakami Troupe, Matsuki Bunkio, and Boston Japonisme. *Theatre Journal*, 65, 489–505.
- Russell, J. G. (1991). Race and reflexivity: The black other in contemporary Japanese mass culture. *Cultural Anthropology*, 6, 3–25.

- Russell, J. G. (2012). Playing with race/authenticating alterity: Authenticity, mimesis, and racial performance in the transcultural diaspora. *CR: The New Centennial Review*, 12, 41–92.
- 櫻井孝昌 (2009) 世界カワイイ革命—なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか— PHP研究所。
- Saito, Y. (2007). *Everyday aesthetics*. Oxford University Press.
- Saito, Y. (2024). Aesthetics of the everyday. In N. Z. Edward & N. Uri (Eds.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Metaphysics Research Lab, Stanford University.
- Salomon, H. (2018). ‘A paradise for children’: Western perception of children in Meiji Japan (1868–1912). *The Journal of the History of Childhood and Youth*, 11, 341–362.
- Sammond, N. (2015). *Birth of an industry: Blackface minstrelsy and the rise of American animation*. Duke University Press.
- Sherman, G. D., & Haidt, J. (2011). Cuteness and disgust: The humanizing and dehumanizing effects of emotion. *Emotion Review*, 3, 245–251.
- Shiomi, M., Kato, Y., Nittono, H., Anzai, E., & Saiwaki, N. (2025). Effects of a robot’s head-tilting motion and hand gesture on the feeling of kawaii toward the robot and its outfit. *Advanced Robotics*, 39, 1234–1246.
- Sorby, A. (2018). Baby to baby: Sigourney and the origins of cuteness. In M. L. Kete & E. Petrino (Eds.), *Lydia Sigourney: Critical essays and cultural views* (pp. 122–139). University of Massachusetts Press.
- Stearns, P. N. (2010). *Childhood in world history*. Routledge.
- Tsuji, N. (1986). *Playfulness in Japanese art: The Franklin D. Murphy Lectures VII*. University of Kansas: Spencer Museum of Art.
- Wallentine, A. (2024). Beyond cute: A brief history of cupids, cherubs and putti in art. *Art UK* (online). Accessed 26 Sept. 2024. <https://artuk.org/discover/stories/beyond-cute-a-brief-history-of-cupids-cherubs-and-putti-in-art>.
- Williams, B. A. (1910). The negro on stage. *Green Book Album*, 2, 1341–1344.
- 矢島 新 (2019) ゆるカワ日本美術史 祥伝社新書。
- 四方田犬彦 (2006) 「かわいい」論 筑摩書房。
- Yoshihara, M. (2003). *Embracing the east: White women and American orientalism*. Oxford University Press.
- Zelizer, V. A. (1994). *Pricing the priceless child: The changing social value of children*. Princeton University Press.

— 2025. 5. 19 受理 —